

早稲田社会学会ニュース 第54号

2019年10月28日発行

早稲田社会学会事務局
〒162-8644 東京都新宿区戸山1-24-1
早稲田大学文学部 社会学研究室内
Tel: 03-5286-3742
E-mail: socio-office@list.waseda.jp
URL : <http://www.waseda.jp/assoc-wss/>

今回のニュースの内容

1. 第71回早稲田社会学会大会の報告
2. 2019年度早稲田社会学会総会の報告
3. 2019年度研究例会の報告
4. 2019年度研究助成について
5. 入退会者のお知らせ
6. 学会費納入のお願い

1. 第71回早稲田社会学会大会の報告

第71回早稲田社会学会大会は、2019年7月6日（土）に早稲田大学戸山キャンパス33号館第1会議室において開催されました。報告者および報告題目、司会者、討論者は次のとおりです。

一般報告

司会者： 池田祥英（早稲田大学）

報告者： 三津田悠（早稲田大学文学研究科）
道徳社会学への一視角

大貫挙学（佛教大学）

刑事司法における『主体』と『責任』——いわゆる『幼児連続殺人事件』の法廷言説をめぐって

シンポジウム メガイベントは都市に何をもちこたすのか

報告者： 高尾将幸（東海大学）

スポーツ・メガイベントとローカル・アイデンティティ

丸山真央（滋賀県立大学）

メガイベントと「遺産」の都市的文脈

多田治（一橋大学）

都市開発と観光開発の歴史からみたメガイベント

討論者： 浦野正樹（早稲田大学）・新雅史（東洋大学）

司会者： 熊本博之（明星大学）

シンポジウム報告

第 71 回となる本年度の学会大会では、高尾将幸氏、丸山真央氏、多田治氏をお招きして、「メガイベントは都市に何をもたらすのか」をテーマにシンポジウムを開催した。これまで日本は、1964 年の東京オリンピックや 1970 年の大阪万博などのメガイベントを、都市発展の起爆剤として招致してきた。だが経済の成熟期、あるいは停滞期にある現代日本社会において、メガイベントが都市にもたらすものは、以前とは異なるものとなるだろう。2020 年にオリンピック・パラリンピックを控える今、あらためて都市とメガイベントの関係を批判的に捉え返しておくために、このシンポジウムは企画された。

最初に登壇した高尾将幸氏の報告「スポーツ・メガイベントとローカル・アイデンティティ：岩手県釜石市とラグビーW 杯 2019」では、2019 年 9 月に開催されるラグビーW 杯の会場の 1 つである岩手県釜石市の市民を対象としてなされた住民意識調査と、釜石市でのフィールドワークを元にした報告がなされた。高尾氏によれば、W 杯の地元開催を約 6 割の住民が肯定的に評価しており、3 分の 2 の住民は W 杯が復興を促進する可能性があると考えており、そして釜石が「ラグビーのまち」だといわれていることについて共感している人ほど W 杯地元開催を肯定的に評価する傾向があるという。このようにメガイベントの実施はローカル・アイデンティティの強化につながり、そのことがメガイベントへのポジティブな評価につながっていることが確認された。

次に登壇した丸山真央氏の報告「メガイベントと『遺産』の都市的文脈：1970 年大阪万博と 2025 年大阪・関西万博の招致政治」では、「なぜ都市はメガイベントを招致したがるのか」という問いに答えるために、1970 年大阪万博と 2025 年大阪・関西万博の招致をめぐる政治について、開発主義国家論を参照しながら明らかにしていくものであった。結論部では、メガイベントを、ナショナルスケールの政治だけでなく、都市スケールの政治経済からも研究する必要があるという重要な指摘がなされた。

最後に登壇した多田治氏の報告「都市開発と観光開発の歴史からみたメガイベント：大阪万博と沖縄海洋博を中心に」では、1970 年代の 2 つの博覧会を観光開発と結びつけながら論じることで、メガイベントの効果を、インフラなどの物理的な開発のみならず、知覚様式の変容にまで及ぶものとして描き出していった。観光という文化的な営みは、観光をしている人に認識の変更を迫り、そしてまなざされた地域にも自己像の変更を迫る。これは政治経済には還元しつくせない文化的な影響であり、メガイベントを分析する上でも欠かせない視点だといえよう。

これら三つの報告に対して、討論者の新雅史氏、浦野正樹氏からコメントが出され、登壇者がそれぞれ応答、さらにフロアも交えて活発な議論が展開された。メガイベントには様々な主体の多様な思惑が込められている。それゆえにその意味を捉えるための視点もまた、複眼的なものでなければならない。スポーツ社会学、都市社会学、観光社会学を主な専門領域とする登壇者たちと、討論者およびフロアとの視点が絡み合うことで示された知を頭に留め置きながら、2020 年、そしてその先の日本を見ていきたい。

（明星大学 熊本博之）

2. 2019 年度早稲田社会学会総会の報告

2019 年 7 月 6 日（土）17：15～17：45 まで早稲田大学戸山キャンパス 33 号館第 1 会議室において、2019 年度早稲田社会学会総会が開催されました。

1. 議長選出

浦野正樹氏が選出されました。

2. 議事

2-1 報告事項

1) 理事会活動報告（竹中庶務担当理事）

- 2) 研究活動委員会活動報告（石倉研究活動担当理事）
- 3) 編集委員会活動報告（田辺編集担当理事）
- 4) 2019年度研究助成の申請について（竹中庶務担当理事）

2-2 審議事項

- 1) 2018年度決算案の件（土屋会計担当理事）
※同封の決算報告をご参照ください。
- 2) 会計監査報告（柄本監事）
- 3) 2019年度予算の件（土屋会計担当理事）
※同封の決算報告をご参照ください。

3. 2019年度研究例会の報告

第41回早稲田社会学会研究例会は、第二回早稲田社会学会・三田社会学会合同研究例会として以下のように開催されました。

日時：2019年5月18日（土）14時～17時

会場：慶應義塾大学三田キャンパス 南校舎453番教室

司会者：岡原正幸（慶應義塾大学）・石倉義博（早稲田大学）

〔第一報告〕報告者：鳥越信吾（慶應義塾大学）「近代的時間と社会学的認識」

討論者：澤井敦（慶應義塾大学）

〔第二報告〕報告者：大坪真利子（早稲田大学）「カミングアウトの根拠としての「不可視」論の再考と課題」

討論者：熱田敬子（早稲田大学）

研究例会報告

今年度は、昨年度に引きつづき、三田社会学会と合同で、若手研究者の交流を目的とした研究例会を実施した。早稲田社会学会では、自薦および他薦の併用により、報告者を募った結果、文学部助手の大坪真利子氏に報告をお願いすることになった。また、三田社会学会からは、鳥越信吾氏が登壇された。討論者は報告者の意向をふまえ、鳥越報告には慶應義塾大学の澤井敦先生に、大坪報告には早稲田大学の熱田敬子先生に、それぞれお願いすることになった。

鳥越氏による第1報告では、シュッツ、ハルトムート・ローザらの時間論を手がかりに、近代的時間と、それに基づく社会認識を相対化し、過去の他者と未来の他者を視野に収めるような社会認識の可能性についての考察が行われた。第2報告の大坪氏は、性的マイノリティに対する社会的配慮が、当事者によるカミングアウト＝可視化を契機として要請するという現状認識から出発し、配慮すべき対象の可視／不可視と、存在／非存在が結びつけられていることを指摘、不可視かつ配慮がなされるような、当事者の自助努力を必要としない状況の成立可能性への展望が示された。

討論者からの内在的な批判と、報告者による真摯な応答に加え、参加者からも生産的なコメントが積極的に出され、両学会共同で研究の研鑽をはかるといふ、合同研究例会の方向性が固まってきたと感じられた。残念ながら、学生の出席者が少数に留まるなど反省点も多いが、今後も、両学会の若手研究者の交流を生むような企画となるよう、研究活動委員会一同一層努力する所存である。また、末筆ながら、今年度のホストとして円滑な例会実施にご尽力くださった、三田社会学会および幹事の岡原正幸先生に感謝の意を表します。

（早稲田大学 石倉義博）

4. 2019年度研究助成について

2019年度の研究助成の募集に対して、今年度の申請はありませんでした。

5. 入退会者のお知らせ

(省略)

6. 学会費納入のお願い

本年度の学会費が未納の方は、早急にお振り込みくださいますようお願い申し上げます。なお、本状と入れ違いになりました節はご容赦ください。

口座番号：00100-3-38020（郵便振替）

加入者名：早稲田社会学会

（年会費：一般会員 5,000 円 学生会員 3,000 円）

複数年度分の会費を納入される場合、および転居・異動などがあった場合には、通信欄にその旨を明記ください。なお、年会費の納入記録についてのお問い合わせなどがありましたら、事務局 (socio-office@list.waseda.jp) までご連絡ください。

■学会費の納入にご理解とご協力をお願いいたします！

近年、学会費納入率が低下しており、学会運営に支障をきたしております。会員の皆様には、引き続き、早稲田社会学会活動にご理解いただき、会費を納入いただけますようお願いいたします。

以上